

イタリアにおけるヴィッラ（田園住宅）の形成とその系譜に関する調査研究

長尾 重武

—都市生活と「余暇」の過ごし方について—

はじめに

今日、わが国の都市化は急速に進み、その一方で、リゾート開発が問題にされている。都市への過度の人口集中と開発の分散による自然環境破壊は目を覆うばかりである。バランスのとれた環境整備こそが緊急の課題であるが、この課題は容易には解決されそうもない。わが国ではこうした事態は全く前例がなく、経済至上主義によって人間の生活がしばしば省みられないからである。

そこで本研究は、都市生活の長い伝統を持つ地中海地域、とりわけイタリアの都市とヴィッラに注目してみたい。ヴィッラとは都市郊外あるいは田園における住宅形式（その機能と用途は幾つかに分類でき、別荘というより意味が広い）を指す。ヴィッラの成立は古く古代ローマ時代に遡るが、それが豊かに再生するのは中世末からルネサンス・バロック期である。更にその後、近代のリゾート地開発が展開され、また、都市の中にヴィッラと同様な田園住宅のスタイルが導入されることさえあった。いずれにせよ、都市生活を基盤に「余暇」をどのように過ごすかという問題が背景にある。

イタリアにおける都市生活の長い伝統は、都市を見事に発達させただけでなく、都市との関連で「余暇」を過ごすための場所を造りあげ、イタリア半島に時間をかけた環境整備をもたらした。それは同時に「都市」と「田園」との相互関係の中で生まれたものである。ヴィッラは都市と田園の両者を橋渡しする重要な建築タイプであり、以上のように見るときヴィッラは単に建築であることを越えて、象徴的な意味を持つようにさえ思われる。

以上のような観点からイタリアのヴィッラの形成とその系譜を探るのが本研究の目的である。この場合、研究の範囲として、私たちは、古代ローマ期から現代まで、特に時間と場所を限定しない。広くイタリアのヴィッラについて考えてみよう、というのが、私たちの研究会の主旨である。

というのも、イタリアのヴィッラについての研究は少なくとも建築に関する限り個別的に行われ、それなりの研究の蓄積がなされてきたが、重要な観点が抜けているのではないかと考えるようになった。それは、ヴィッラが建築のタイポロジーとして興味深いことはいまでも

ないことだが、それと関連した人間のアクティビティ、ヴィッラを舞台にして演じられる人間の側のあれこれこそが、重要だという認識を持つに至ったからである。一方、イタリアにおける都市・建築史の課題が、最近になって変化を経験していることも見逃せない。その変化とは、都市史研究の成果がかなり実りを見せてきたこと、また、都市計画上の歴史センター（旧市街）保存の実践的な制度がほぼ確立するに至ったことを背景にして、都市から田園へという視点の転換である。このところ盛んになされる庭園研究もその一端だし、風景への着目も同様である。いいかえれば、イタリアにおける都市・建築史研究が、一方で、現実の課題と即応する形で展開されていることを物語っている。

私たちの研究会も、イタリアの調査研究を続けつつ、私たちの日本の住生活について当然考えざるを得ないという現実の課題を踏まえることが意図されている。

今回の研究調査報告は、1・2・3章でイタリアにおけるヴィッラの成立からルネサンス以降まで上述の観点から改めて概観し、4・5・6章で、ヴェネツィアを中心としたヴェネト地方と、フィレンツェを中心としたトスカーナ地方で行ったフィールドワーク、ケーススタディを通して得られた成果を報告している。いずれもまだ、個別的なものではあるが、示唆するところ大だと考えている。
(長尾)

第1章 ヴィッラ形成の歴史的背景

古代以来ヴィッラは、その所有者の愉しみと安らぎのための田園住宅であった。それは同時に農場経営の拠点でもあったが、享楽の要素の有無が住居としてのヴィッラと農家を本質的にわけ隔ててきた。

また、ヴィッラは他の建築類型と比較して特異な存在であった。邸宅や教会、あるいは工場などは、統治者の役割や典礼の性格や生産体系が変化するのに伴ってその形態や目的も変化してきた。しかし、ヴィッラに対する要求は普遍的で実質的に変化していない。ヴィッラに求められてきたものは、現実と隔絶したファンタジーに立脚した精神的・観想的な場であり、社会や科学技術の進歩に影響されることがなかったからであった。それゆえ、

建築類型としてのヴィッラは、施主、建築家の創意の対象であり、その時代の近代性を表徴してきた。

ヴィッラは都市の存在と分離して理解されるべきではない。それは都市内の快適性を補完するものとして存在していたからである。都市とヴィッラの関係は市壁外にヴィッラを持つ囲壁都市を描いた古代ローマのレリーフや中世の都市図が如実にそれを物語っている。ヴィッラは、基本的には都市の商工業による余剰資産によって、あるいは農業によって維持されている場合には都市の需要を越えた余剰生産物の必要性に伴って建設され、維持されてきたのである。

また、イタリアでは古代ローマ以来、都市内での生計を維持するためのネゴティウム（活動）と本来の人間的生活としてのオティウム（余暇・観想）という対立概念で日常生活をとらえていた。ヴィッラの構想はそのような発想の中に根差していた。小プリニウス(61-114ca.)は書簡の中で次のように表現する。「いかなるネゴティウムよりも敬愛すべき、おお、なんと甘味で高貴なオティウムよ」。その上、ヴィッラの創意は田園と都市の対立、つまり一方の美德と他方の悪徳との対立にある。その表現は古代ローマ文学の中にも明確に示されている。大カトー(前234—149)やファッロ(前116—27)の『農業論』におけるヴィッラは、ストア哲学的な戒律の中で小規模の田園の所有地に慎ましい農家を購入し、都市の汚れから逃れ身を清めるために自らが耕作することを都市の実務家に奨励したものであったし、小プリニウスの書簡から窺^{うかが}えるヴィッラは、「くつろぎと気苦勞のない贅沢があり、……健康的で澄んだ空気があり、常に静かで平和であり、学問によって精神を鍛え、狩猟によって肉体を鍛える」ための豪華なヴィッラであった。ともにオティウムを享受しながらも、前者は禁欲的であり、後者はある意味では都市内で抑制されていた消費欲を満たすための浪費に支えられていた。後世のヴィッラ建設熱もその時代の流行の中で、大カトーと小プリニウスとの揺らいでいたといつてよい。(石川)

第2章 ヴィッラの復活

ヴィッラの復活は都市の復活と密接な関係を持っている。ヴィッラは都市の成長期に興隆し、都市の衰退とともに衰微した。したがって、イタリアでは中世末期の都市の復活とともにヴィッラ建設熱は高まっていった。ジョヴァンニ・ヴィッラーニ(1276ca.—1348)は『クロニカ』の中で、当時のヴィッラの建設ブームに眉をひそめながらも、夏の裕福なフィレンツェ市民たちの集団移動について語っている。富裕な家族は1年のうち少なくとも4か月はコンタードで過ごすという。

また、15世紀の様子を記す貴重な史料である『ストロツ

ツィ家文書』によれば、ストロツィ家系のフィリッポ・ディ・マッテオ一家は1480年の4月から10月の初めまで6か月間をヴィッラで過ごしている。まず、レ・セルヴェのフィリッポの姉のアレッサンドラ・ストロツィ＝ボンシのヴィッラを夏の主住居とし、その後サントウッチョの修復したばかりのヴィッラを利用している。ヴィッラでの経費はすべて都市に居るマッテオから、妻のセルヴァッジアと姉に送金され、ときには長男のアルフォンソがその役を務めている。マッテオはその間にヴィッラと仕事場のフィレンツェの間を何度か往復している。

一般的に15世紀後半には夏季の出産、それに伴う洗礼、結婚式、葬儀はそのほとんどがヴィッラで行われるようになり、そのために、親戚・知人たちにとって式典へ出席することは非常に煩わしいものとなった。

ほとんどヴィッラに住んでいるフィレンツェ市民たちは田舎に居住することによって都市での体面を失ったが、都市での盛装や接待から逃れることができ、生活費が削減できた。15世紀にストロツィ家は6家族で24のヴィッラを所有し、ほとんどの家族がヴィッラを主住居とし、都市邸宅の所有部分を売却するものまで出てきた。

フィレンツェ商人は、用心深く、抜け目がなくて、政治に対しても疑い深かった。派閥争いや陰謀や政治不安が絶えずつきまとう都市生活の中で、「オティウム」と「ネゴティウム」を他のどの都市民よりも明確に意識していたであろう。

ポッジョ・ブラッチョリーニは、その『書簡集』の中でテッラーノヴァ滞在の悦楽について語る際には、その精神は本能的にホラティウス(前65—前8)を追い求めていたが、フィレンツェ市民としての義務が彼に蘇ると、すぐにその引用はキケロに戻ったという。また、コシモ・デ・メディチもフィレンツェを離れ、トレビオのヴィッラで、彫像と果樹を両脇に並べたパーゴラの下を独り静寂を味わいつつ散策するとき、同様の想いが交錯したことであろう。

イタリアの15世紀以降のヴィッラの復活は、大カトー、ファッロ、ウェルギリウス、ホラティウス、小プリニウス、ウイトルウィウスなどの共和制後期から帝政初期のローマの著述を参照することによって正当化された。

しかし、メディチ家の初期のヴィッラ群も中世の城館を改築したもので、ミケロットソによるフィレンツェ近郊のフィエーゾレのヴィッラ・メディチ(1460ca.)以降、ヴィッラが最も革新的な建築様式の規範となるべきであるとされていった。

ヴィッラの類型については私たちの研究主旨から外れるのでここでは言及しないが、ヴァティカンのベルヴェデーレ、ヴィッラ・マダーマなどの古典古代のヴィッラを再現する意図を持ったヴィッラ計画の中で古代ヴィッ

ラが定型化していった。

(石川)

第3章 ルネサンス・ヴィッラの展開

16世紀のローマではヴィッラ・マダマやファルネジーナに続いて、ユリウス3世のヴィッラ・ジュリア、ヴァチカンのヴィッラ・ピア（ピウス4世のカジノ）、メディチ家やランツィ家のヴィッラなど、教皇、枢機卿、有力者のヴィッラが都市周縁部に次々と設けられていく。この傾向は次の世紀以降に定着し、主な一族はパラッツォとヴィッラの双方をローマに保有するようになる。ドーリア＝パンフィーリ家、コロナ家、そしてボルゲーゼ家（現在の広大なボルゲーゼ公園）更にはキリナーレ丘の教皇ヴィッラなど、しだいに大規模な例が増えていった。

近代に至るまで古代ローマの規模を回復することのできなかったローマは、イタリアの中では例外的に散漫な都市で、長い間中心部にも空き地や畑を抱えていた。ヴィーニャと呼ばれる葡萄畑を中心とする果樹園に由来する敷地が多かった周縁部のヴィッラでは、都市にありながら、かなり広い庭園や農園を持つのが普通だった。ここでは都心の雑踏を離れて、ゆっくりとした生活を楽しむことができたが、更に、様々な趣向で人々をもてなす社交、つまりは政治の舞台でもあったはずである。宴会はもちろん、演劇をはじめとする多様なイベントが催された。

16世紀前半に成立した古代復興をイメージした華麗なヴィッラは、建築内部の装飾、壁画、調度から、庭園部の噴水、泉水、人工洞窟、野外彫刻まで、すべてを総合した小宇宙を造形していくものだったが、マニエリスム、バロック、ロココ、新古典主義、といったその後の時代によって様々な変化を見せながらも、豊かな成果を生み続けたのだった。ただ後代になるほど巨大化するヴィッラはしだいに別荘というよりは本邸の意味を持つ場合も出てくる。

都市からやや離れて、隠棲や保養のための普通の意味での別荘は、狩りのための宿舎に始まったものもあったが、やはり同様の展開を見せた。ローマ近辺では、ティヴォリのエステ家、カプラローラのファルネーゼ家の別荘、バニャイアのヴィッラ・ランテ、そしてフラスカーティやカステル・ガンドルフォといったローマ南方のヴィッラ群がある。

この中からは、ボマルツォの庭園のように、宿泊など住居としての最低の機能すら持たない、理念だけで造られたようなものさえあらわれる。全く作風は異なるのだが、マントヴァにジュリオ・ロマーノによって造られたパラッツォ・デル・テ、そしてヴィチェンツァ近郊のパラーディオの作品ラ・ロトンダも、ある世界を創り出す

ことだけに捧げられたという点で共通のものだった。

しかし、パラーディオの活躍したヴェネツィア共和国では、農場経営に力を入れ始めていた。農場主の邸宅として、農作業のための施設や倉庫、家畜小屋などを備えたヴィッラが求められていた。紳士たちの流行であった人文主義的な活動の波にのって、ロトンダで理想の古代的ヴィッラを追求したパラーディオだったが、その古代神殿風の本体に農業のための空間である長い翼部を組み合わせ、この国の要求に応じてゆく。こうして生み出された類型は、ヴェネト地方で長く受け継がれていくが、一方でイギリス、アメリカの建築に大きな影響を与えることになった。

ヴィッラは、少なくとも19世紀のヴィッラ・タイプの住宅が民衆化するまでは富裕なブルジョアジーのみに入手可能なものであった。ヴィッラの歴史における最も急激な変化は、一般的には民主化により下層中産階級の都市市民が急増する19世紀初頭に起こり、イタリアもその例外ではなかった。

(末永)

第4章 ヴェネト地方のヴィッラの現況

ヴェネツィアの後背地にあたるヴェネト地方の田園・丘陵地帯は、フィレンツェ周辺とローマ周辺と並んで、イタリアでもヴィッラの文化が最も豊かに開花したところである。

15世紀末、新航路の発見によってスペインとポルトガルが世界貿易に進出したことと、オスマン・トルコの脅威が強まったことにより、それまで東方貿易を独占していたヴェネツィアは大きな打撃を受けた。それを機に、ヴェネツィア貴族たちは、危険の多い貿易よりも、大陸に進出し土地を所有して、農場を経営する道を選んだ。これがヴェネト地方のヴィッラの形成につながった。したがって、この地域のヴィッラは農業経営の拠点としての性格を強く持っていた。貴族たちは同時に、都市を離れ、田園でゆったり過ごすことを好み、特に夏場はヴィッラに長期滞在した。ヴィッラは接客、社交の場としても欠かせない社会的性格を持つものでもあった。ヴェネト地方全体にまんべんなくヴィッラは分布するが、ヴェネツィアからパドヴァに向かうブレンタ川沿いやヴィチェンツァの近郊に特に集中している。

ヴェネト地方のヴィッラは、近代の1時期ないがしろにされ、荒廃していた。特に、第2次大戦中に爆撃で被害を受けたり、ドイツ軍が駐留していたために荒れ果てたところも多い。ヴィチェンツァでは、戦後、地元の学者チェーヴェゼ氏が中心になって、ヴィッラの建築作品を再評価する運動が起こり、その推進を目的としてパラーディオ・センターが創設された。この街の郊外にある修復なったヴィッラ・コルデリーナ（G. マッサリ設

計)にこのセンターがまず置かれ、1954年から活動が開始された。その後、規模が拡大し、現在ではヴィチエンツァの中心のバシリカの一部に場所を移して建築文化の研究・普及に活発な活動を続けている。

近年、ヴィッラの調査研究は着実に進められており、歴史的・建築的価値の高いものばかりか、マイナーなものまで含め、すべてのヴィッラを対象とした調査がソプラインテンデンツァ(文化財監督局)のイニシアチブで目下進行中である。特に、ブレンタ川沿いの全ヴィッラの調査の成果を発表する展覧会が企画されている。主屋のみか、すべての付属屋に加え、ラビリンス(迷路)などの庭の構成を調べ、敷地、周辺との関係、その歴史の変遷などを分析する新たな方法論による研究が行われて、風景や環境の中でのヴィッラの価値の再評価が進められている。ヴィッラの修復に対し、補助が出る制度も整っている。

ヴィッラの現代的利用も積極的に進められている。ヴィッラの多くは私有であり、所有者の意思によって、展覧会、コンサートなどを催し、文化的活動の拠点となっているヴィッラが少なくない。学会、会議、シンポジウムなどにもヴィッラがよく利用される。あるいは重要な客を招いての晩餐会、パーティーにもヴィッラの空間はよく活用される。こうして実際にヴィッラを利用することにより、使用料を取ってヴィッラの維持管理をまかなうこともできる。「ラ・ロトング」も貴族の末裔が所有するが、記者会見などの文化的催しにも利用される。

ヴェネト地方の2つの典型的な使い方を示すヴィッラを調査する機会があったので、報告する。

1つは、トレヴィーゾから北へ少し行ったモンテベッルーナの街の郊外にある「ヴィッラ・マンジッリ」である。いまだに農場を経営するヴィッラの典型である。主人のヴィットリオ・グッリオン・マンジッリ氏は、このヴィッラの一部にオフィスを構えながら農場を経営し、同時に、ヴェネト州の予算編成の助役を務め、毎日車でヴェネツィアへ通う。母親(ヴィッラの一部に独立して住む)、夫人と3人の子供たちとこのヴィッラに住んでいる。主屋は古い街道に面し、門と塀を巡らし少し下がった位置にある。敷地の角には私設チャペルがある。大きな番犬2頭がいつも玄関のところで目を光らせている。主屋の1階部分に事務所機能があり、専属の女性スタッフがいます。古いヴィッラの中で、コンピューターを使って農場を経営している光景は目を見張らせる。奥には大きな会議室、応接室もある。2階以上が客室や家族の居住部分になっている(図1)。

その背後に2棟、付属屋の翼が平行に伸びて、中庭(裏庭)を形づくる。一方の翼には、カンティーナと呼ばれるワイン貯蔵庫と車庫がとられ、中庭をはさんで反対側の翼には、その先端に馬小屋があった。その象徴として

壁に馬の顔の彫刻がたくさんついている。この棟の裏手には、庭園が広がっている。幾何学的なイタリア式庭園がまずあり、その後ろに自然形態のイギリス式庭園が続く。

庭の背後に、広い農場が地続きで展開している。大きな温室が造られ、生花の栽培が行われている。横道の向こうに酪農の施設があり、牛の飼育が大規模に行われている(図2)。飼料にするトウモロコシもこの農場で栽培される。かつては養蚕、ワイン用のブドウの栽培も行っていたが、手が掛かるので今はこれをやめ、近郊農業としての生花の栽培に力を入れている。土地の面積は全体で150haに及び、そのうち農地が100ha、森林が50haを占めるといふ広大なヴィッラである。

もう1つの例は、パドヴァから車で30分の豊かな田園地帯にある「ヴィッラ・ブジナーロ」である。こちらはもっぱら田園の中の住まいとして使われているヴィッラの典型である。主人のアルド・ブジナーロ氏は、有名な家具メーカー、カッシーナの国際マネジャーの仕事をしており、世界各地にこの自宅から出掛ける。オフィスには行かず、すべてこのヴィッラを基地に活動する。ヴェネト地方のよき伝統である田園に住むことが子供の頃からの夢であった。1914年に氏の祖父が購入し、穀物倉庫とカンティーナとして使われていたこのヴィッラを、相続時に、自分の夢を実現するために兄弟から買取り、1965年からレストア(修復)を開始した。主屋の屋根裏には、イギリスの建築家グレニー・コリンの設計でゲストルームができ、1970年には、親しい友人であったカルロ・スカルパが門や庭、プールなどの外部空間を設計した(図3)。

この建物はヴェネト地方のヴィッラの典型的な構成を示す。2階にあたるピアノ・ノービレは、3列構成の中央に大広間、両側に居室群を配する(図4)。1階には台所、食堂、カンティーナが置かれ、屋根裏にはゲストルームがとられている。壁面に残るフレスコ画に1627年の年号が記されているところから、建設の年代は少なくともこれ以前に遡ることが分かる。ヴィッラの裏側の庭の芝生の上に、戸外のテーブルが置かれており、季節のよいときは毎日そこで食事をするという。庭の隅に、バーベキューができる一角がスカルパのデザインで作られていて、田園の生活を楽しんでいる様子が分かる。その外側には農園が広がっており、トウモロコシ、小麦の栽培をプロに委ねながらも続けている。農業へのこだわりも捨てていないのである。仕事から、大勢を招いてのパーティーも多く、住込みのハウスキーパーを置いている。

豊かな自然を誇るヴェネト地方では、歴史的にも田園に住む伝統が強いが、現在、ヴィッラのみか、古い田舎家(農家)を買って改造し、そこに住む人々が増えている。その例を1つ見てみたい。

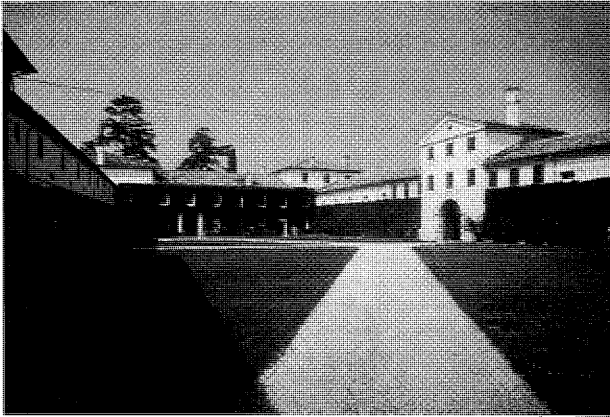


図1 ヴィッラ・マンジッリ 中庭の正面奥が主屋

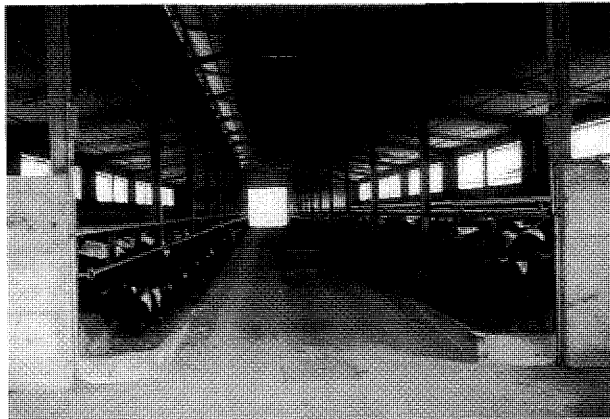


図2 ヴィッラ・マンジッリ 農場の牛の飼育施設

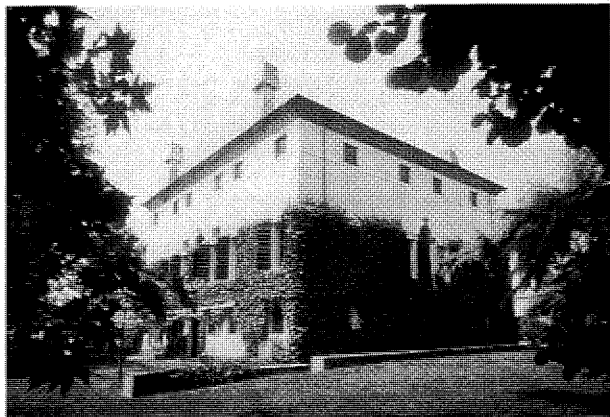


図3 ヴィッラ・ブジナーロ 外観



図4 ヴィッラ・ブジナーロ 2階大広間

パドヴァの歴史的街区の中心部にある古いアパート（パラッツォの一角）に住むコーヴィ教授（パドヴァ大学）の家族は、パドヴァから車で1時間ほどの緑豊かな村ピオンビーノ・デーゼの田園の中に週末住宅を持つ。17世紀に造られた水車小屋で、1967年までは小麦を挽く2つの水車が機能していた。古い街に住み、庭が持てなかったコーヴィ氏は、この水車小屋のまわりの自然に魅せられ、これを買った。建物を修復する一方、植生など庭についての研究を始め、自分自身で庭づくりを手掛けてきた。今ではバラ園やナシ、リンゴなどの自然園が見事に出来上がっている。水車小屋として造られたこの建物は2階建てで、改造によって、もとの作業スペースだった1階に台所、食堂、居間が、粉の収納空間だった2階に大きな居間と寝室、バスルームが造られ、快適に過ごせるようになってきている（図5、6）。毎週末には、家族ばかりか、親しい友人たちが集まり、のんびり楽しくこの田舎家で過ごす（図7）。自然とともに生きるライフスタイルをさりげなく追求する典型的なイタリアの家族といえる。（陣内）

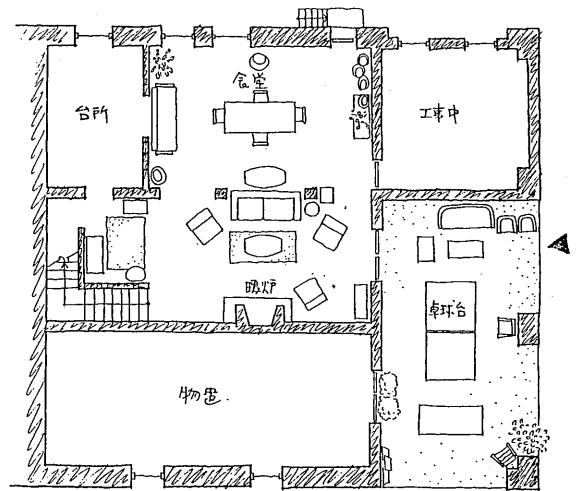


図5 コーヴィ家の週末住宅 1階平面図

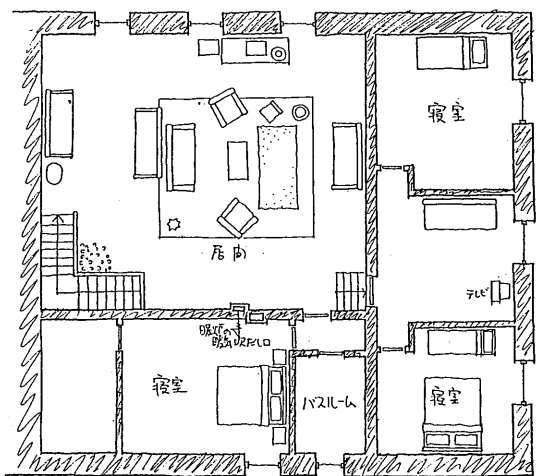


図6 コーヴィ家の週末住宅 2階平面図

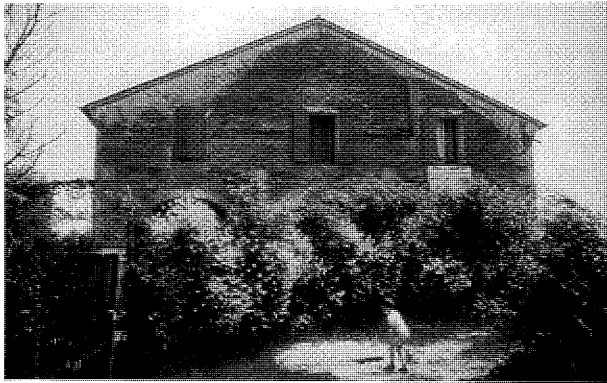


図7 コーヴィ家の週末住宅 外観

第5章 トスカーナ地方における現代の別荘事情

現代イタリアの別荘とはいえ、新築されるケースはきわめて少ない。トスカーナ地方でも別荘のほとんどは、カサ・コロニカ（18世紀以降、各地で建てられた組積造の農家）がレストア（修復・再生）された物件である。都市内の住宅も、郊外の別荘も同じくレストアによって一般市民が入手し、不動産価値が生じる仕組みは、歴史の国イタリアならではの財としての建物のリサイクルを可能にしている。一方、ルネサンス以降、数多く建てられた歴史的なヴィッラはむしろ生来の別荘機能を果たしていない。トスカーナ地方に点在するメディチ家のヴィッラにしても、個人の別荘として利用される場合は稀である。現代では裕福な階層にとってさえ、ヴィッラは規模が大きく維持管理に莫大な費用がかかるため、レンタル・ギャラリーや会議場、迎賓機能を持つ公共的施設として利用される傾向が強い。以下、イタリアの別荘の現状を、レストアと不動産価値、売買と入手のパターン、機能と利用のされ方、の3視点からトスカーナ地方の実例を挙げて述べていく。

5-1. 廃屋+修復=別荘

イタリア人は自宅を中心とした都市生活に対するもう1つの重要な生活領域の拠点として郊外の別荘を持つ。別荘は一部の特権階級のものではなく、夏の長期休暇や週末を経済的に過ごすための道具として一般市民に普及している。経済的余裕のない大学生でさえ、友人と協力して別荘を持つことができるのである。フィレンツェから北東に車で4時間ほど行ったアペニン山脈の山あいの町パラッツォロ周辺は、丘の斜面に廃墟となった石造の建物が幾つも点在している。海拔約1000メートルにあるこの山々の斜面や高原は山羊の放牧地としてかつて利用され、その管理のためにこれら石造の番小屋が建てられていた。近年、牧畜の不振からその多くは見捨てられ、廃墟と化した。フィレンツェ大学建築学部の学生たちは、この美しい環境にある廃屋に目をつけ、所有者とある契約を交わした。所有者が、破壊された建物を学生たちに

無料で提供し自由に使用させる代わりに、壊れた部分は学生たちの労力と費用によって修理するといった内容である。このような廃屋を修復して別荘とするケースは、フィレンツェ郊外の別荘の入手法としては主流である。売買の対象となって不動産屋に出回る物件は修復が完了したものばかりだが、賃貸の対象となる物件のほとんどは修復を要する廃屋ばかりで、破壊の程度に応じて賃貸の額が変化する。このパラッツォロの場合は、借りる人が修復者であり、しかも大学の建築科学生ということで、賃貸料は取れなくても所有者にとって十分なメリットはある。雨風で少しずつ崩れていく不動産を建築家の卵たちが修復して住めるようにしてくれるわけで、不動産価値の増大を考えれば、どちらが得をしているともいえない。ともかく経済的余裕のない学生や働き始めの若者にとっても、こうしたかたちで別荘を手に入れる機会は日常的にあり、若い頃から郊外生活の拠点として利用できる仕組みとなっている。その仕組みを支えているのがレストアという財としての建物維持のための社会的、経済的行為なのである。

5-2. 長期休暇と別荘

別荘を一部の裕福な階層が新築したり商品として売買する日本では、労力と時間をかけず瞬時に手に入れられる代わりに高いお金を払うことになる。結局は時間とお金相殺されるわけだが、様々な理由からイタリアのような別荘の持ち方は日本では難しい。まず廃屋がない。地方の太い柱梁を使った木造民家や土蔵などはあるにせよ、その数は少なく、イタリアのように膨大な数の組積造の廃屋がストックとして半島全体に分布している状況とは異なる。次に時間がない。たとえ格好の古い民家を手に入れても、夏期休暇でさえ2週間も取れない国では、何年かけても自分の別荘を造ることはできない。更に、別荘を廃屋から少しずつ自分の手で造り上げることに喜びを感じ、休暇をそれに充てようとする日本人自体が少ないのかもしれない。短時間に集中的にお金を投入する日本人とは全く違ったスタイルの休暇の過ごし方がイタリアにはあり、その根底には「時は金なり。」が尊重される日本と、「金をかけずに時間をかける。」を基本とするイタリアとの社会構造、慣習、民族性の違いがある。使われ方についても日本とは大きな差異がある。1~2か月の夏期休暇を過ごすイタリア人は、別荘において特別な非日常的体験をしているわけではない。都市内の自宅とは異なる条件の場所と住居に身を置いて、日常生活そのものを営むところに価値を見だし、それが休息につながると考えているのである。それは、人生の中でもう1つの日常生活を持つための休暇であり、その拠点として別荘をとらえている。一方、自然の美しい風景に飽き足らず様々なアトラクションやレジャー施設がないと

ゾート地として成立しない日本では、短期間に高額を消費して非日常的体験を買う拠点として別荘をとらえている傾向が強い。

5-3. 週末休暇と別荘

フィレンツェからピサ行きの電車に乗り、アルノ川沿いの丘陵地帯を車窓から眺めると、'Vendita' (売り物) と大きな看板を掲げたやや崩れかかったれんが造の建物を目にする事ができる。この辺りは、赤ワインの産地として有名な地域で、ブドウやオリーブの収穫のために使用されたカサ・コロニカ (18世紀に遡るものもある) と呼ばれる組積造の民家の廃墟が無数に点在している (図8)。このような物件は修復後、不動産業者を通じて売買あるいは賃貸され、アパートや個人の別荘として利用されている。また、ファットリアと呼ばれる農場もトスカナ地方には多数分布している。この場合は複数の建物からなり規模も大きいので、修復して会社の事務所や保養施設として再生されることが多い。このように、ピサやフィレンツェから車で30分ほどの田園に別荘を持つ場合は、先に述べた長期休暇用別荘というよりは、毎週金曜の夜から日曜までを過ごす週末住宅として使われる。イタリア人は1週間の仕事のストレスや疲労を週末の2~3日の休息で確実にとってから次週の仕事にのぞむというサイクルが徹底しているため、週末住宅としての別荘は娯楽やレジャーといった一時の気晴らしのためのものではない。むしろ、体力的にも精神的にも健全で幸福な人生を送るための生活の道具として位置づけられ、1週間の仕事と休息のリズムを調える重要な機能を担っているのである。

5-4. 農作業と別荘

稀に別荘が新築されることもあるが、その場合も日本の使われ方と異なることが多い。筆者が留学中に設計する機会を得た別荘は、やや特殊な機能を持ち合わせていた。フィレンツェの郊外、車で2時間ほどのアルノ川沿いの平野にあるモンテスペルトリの敷地には、木造の小さな納屋が建っているだけで、周囲は全く人家のない広大なブドウ畑が続いていた。クライアントはフィレンツェに住むが、祖父の代からこの土地を所有しワインの生産を小規模ながら営んでいた。この納屋を壊して別荘を新築する仕事を依頼されたわけだが、その際、長期休暇や週末を過ごすため以外の特殊機能を備えることが要求された。それは毎年9~10月に行うヴェンデミア (ブドウの収穫) の際の農作業場としての機能であった。クライアントは、自分のブドウ畑で造るワインをボトルに詰めネーム入りのラベルを貼って少量とはいえ出荷している。大きい土間のスペースを持つ一風変わったプランになったが、素材はれんがで単純な箱形、カサ・コロニ

カの形式に倣って前面に列柱廊のような半戸外スペースを造り、葡萄を搾る農業機器を収納する部屋もシャッター付きで側面に設けた。農作業のための小屋として別荘を企画しなければならなかったもう1つの理由は、その土地の用途が農地であり住宅を建てることができなかったためである。市の建築課に確認申請を出す際も、別荘としてではなく既存の納屋の建て替えとして申請し、申請図面にはキッチンやバスルームは描かず壁の線だけ引いて提出した。完成した年のヴェンデミアの時期に様子を見に訪れると、クライアントは、近隣に住む農夫を4~5人集め、収穫作業に精を出していた。鉢で1つ1つ切られた熟れたブドウは運搬用の小型トラックに山積みされ、別荘の土間に次々と運び込まれ、それを搾る機械に順に入れられる。この時期には別荘の面影はなく、完全に農家として機能するのである。このように、年に1度の収穫の時期にアクティビティが頂点に達する別荘もあり、それは毎年行われる祝祭的行事として、1年単位の人生のリズムを刻むのである。(野口)

Stante, e prospetto della nuova Casa per il Sodero della Finibus chesloroni. Prospetto. Domenico Vangi.



Stano as Terreno.

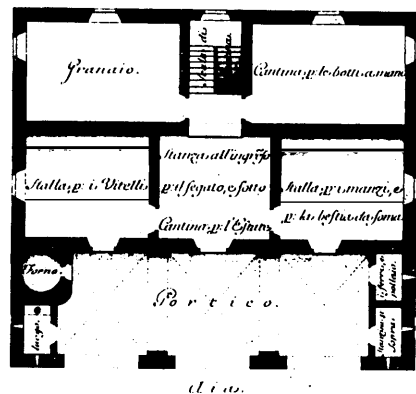


図8 フラシネートのファットリアの中にあつたカサ・コロニカ (1780年頃)
Gori-Montanelli; Architettura rurale in Toscana, Edam Editorice, 1978, Firenze p.53より.

第6章 カサ・コロニカのレストアウロの1事例

知り合いの建築家の事務所が実測調査を終えてレストアウロを待つばかりの、1700年代のカサ・コロニカを1つ抱えていた。2人の所員がそれぞれの仕事に忙殺されていたせいもあって、幸運にもその日のうちに基本設計の担当に決まり現場を見に行くことになった。事務所のあるエンポリはフィレンツェの西45kmほどにあり、ピサとのちょうど中間に位置する都市である。近郊のどちらの都市に行くにもだいたい20分くらいなので、ここに居を構えて通勤する人が多い。したがって、昼間は閑散とした町になる。事務所のボスはフィレンツェ大学建築学部出身である。現在40歳の彼はこのエンポリで生まれ育ったいわば土地っ子で、他のイタリアの建築家と同様に地元と密にかかわりながら設計活動を行っている。夫人も建築家として近郊のサン・ミニアート市で都市・建築課に勤務し、コムーネの様々な計画の管理に従事している。今回のレストアウロの仕事はこのサン・ミニアートに住むクライアントが持ち込んだものだった(図9)。

車は数分でエンポリの市街を抜け、フィレンツェとピサ、リヴォルノを結ぶ高速道路に入った。西へアルノ川に沿って進むと、車窓の右手には平野の畑が続き左手には小高い山の連なりが見える。その頂の1つにイタリア特有の褐色の小都市サン・ミニアートが見えたとき、車は高速道路を降りてその山並みに向きを変えた。裾野から一気に坂道を上がると、沿道の木々の梢の先にわれわれのたどってきた平野がその全貌を明らかにする。糸杉たちが黒々と無言のうちに聳える共同墓地を過ぎると散在した人家が目につき始め、やがて尾根沿いの道の両側に家々がびっしりと並ぶ。トスカーナの丘上小都市サン・ミニアートにはグリッド状の街区もクモの巣のような迷路もない。あるのはただ街を貫流する1本の尾根道の両側に並ぶ建物の連続立面群のみである。ヴァザーリが設計したセミナリオを通り過ぎ東西1.5kmほどの中心部を抜け出た車は、緩やかにアップダウンを繰り返すうねった丘陵地帯を走り始めた。斜面を覆うオリーブや糸杉の木立ちの中に家屋が点在し、その赤茶けた屋根瓦と漆喰の剝落した壁が時折見え隠れする。今回レストアウロされるカサ・コロニカはこうした田園風景の中の高い常緑樹に囲まれて佇んでいた。

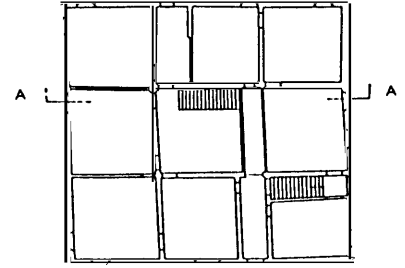
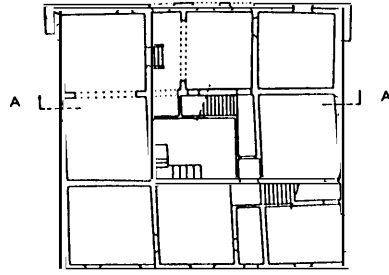
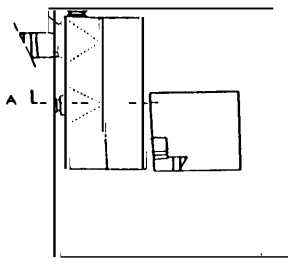
プランはほぼ正方形で、今では不揃いになった窓の配置、水平力に負けて開きそうな壁を支えるために各所に添えられたバットレスが、幾度も補強された改修の歴史を物語っている。唯一若干の装飾を施されたピエトラ・セレーナの開口部のみが往時の姿を探る手掛かりである。内部に足を踏み入れると、レストアウロ前の徹底的な調査のために一切の内装材が剥がされた状態で、天井は取り払われ壁のれんがや床のモルタルも露わになってい

る。建物を裸にすることによってその変遷がすべて分かるのだという。調査の結果浮かび上がった建物が経た歴史は、実際のレストアウロに当たり建物のどこが本質的に重要で、何を残しどこを除去して良いのかを考えていく上での拠り所となる。例えば、1700年代に当時の農場経営の拠点として建てられたこのカサ・コロニカは、使用されているれんがの形状の違いから地下のカンティーナ(ワイン貯蔵室)とその上部2層が後世の増築であることが分かった。また中央部の1階床材を除去した結果、カンティーナに通じる階段が出現し、2階天井裏ではソットテット(屋根裏部屋)がかつて存在したことも明らかになった。

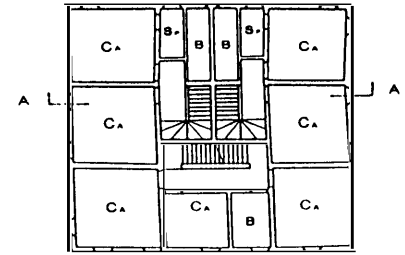
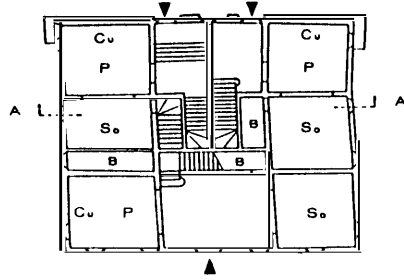
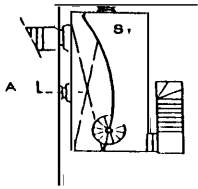
イタリアにおいてはごく一般的な庶民の住宅でさえ数世紀前に建てられたものが多く、そのほとんどが経年による老朽化や現代生活に見合った設備の導入のために改装を余儀なくされる。しかし所有者であっても簡単に工事の手を入れることはできない。日本とは違い、作者不詳の一般的な建物でさえ法律によってレストアウロの対象として保護されているからである。したがって、レストアウロに携わることは建築家のアクティビティのかなりの部分を占める。ひとくちにレストアウロといっても、それは対象となる既存建築が持つ社会的価値の重さによって手法が全く異なってくる。つまり完璧にオリジナルに戻す保存なのか、それとも大幅な改造を行って建築に新たな機能を付加していくのか。長期にわたる改変を受けながら現在に存続している建物なら、一体どの時点の姿に戻すのか。あるいは建築のたどった時間の積層を尊重し、経時的変化の歴史を視覚化させる方法もある。

サン・ミニアートのコムーネでは建築物の“3段階評価”を行っている。単体として建物そのものに社会的価値のあるもの、風景を構成する一般的要素として必要なもの、そしてあまり重要でない建物、の3つである。コムーネによる評価の高いものであればあるほど、前述のようにレストアウロ前に行く考古学的作業はより緻密な考証が必要となり、費やされる時間も長くなる。ここに紹介するカサ・コロニカは上記の第2のカテゴリーに属するものであり、内部の改修は比較的自由である。実際、今回のクライアントがレストアウロを依頼した動機はまさにそこにあった。1700年代に建てられたカサ・コロニカがどのような経緯で今のクライアントの手に渡ったかは定かではないが、彼自身はサン・ミニアートの中心部に住んでいることもあって、ここ数年このカサ・コロニカは使われることなく廃墟同然の状態にあったという。このままでは建物本体のみならず周囲の草木の管理にも手間がかかり、経済的には何の利点もない。つまりこのカサ・コロニカを所有している積極的理由がないのである。そこで内部を3家族用のアパートメントに分割して売却したいという投機的な意図を持っていた。住宅のレストアウ

現状



レストア後



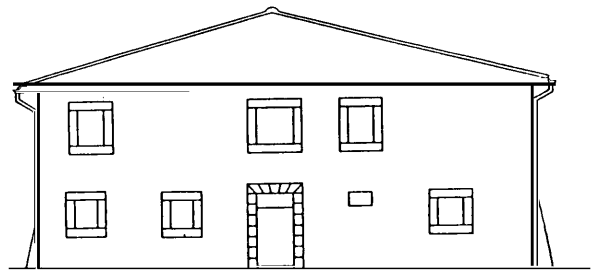
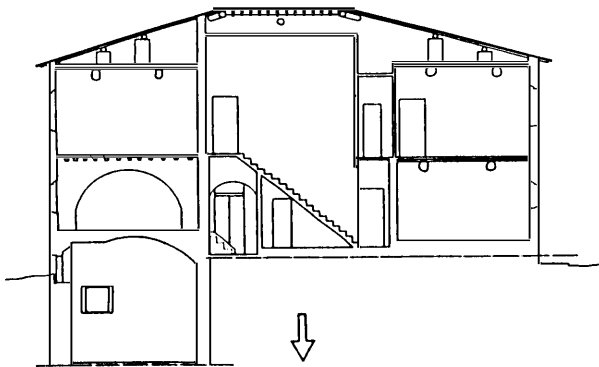
半地下

1階

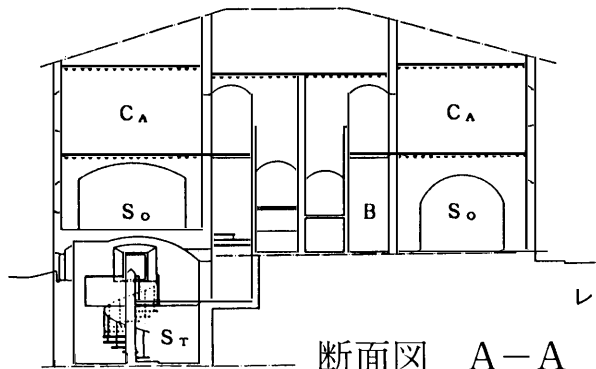
2階

- B バス・トイレ S_o リビング
- C_A ベッドルーム S_T ワークインクローゼット
- C_V キッチン S_T スタジオ
- P ダイニング

平面図



現状



レストア後

断面図 A-A

立面図

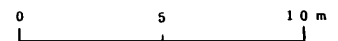


図9 カサ・コロニカのレストア

ロは、ほとんどが今回のようにアパートへの改造や商業空間への転用をその目的とし、建物の資産価値を高めるために行われる。建築の修復・再生が広く認められているイタリアにおいてさえ、時代を経てきた建物が生き延びるためには社会状況の変化に伴う新たな要求に常に応えていかねばならないのである。

今回のレスタウロにおいては、建物外部については、既存の窓をできるだけ尊重し、もし変更するとしても内部空間からの必要性があった場合のみに限定した。また、ファサードについてはカンティーナとその上部が完成した時点の姿に戻すとともに、内部空間の構成がいかなるものであれエレベーションは厳格にシンメトリーを守った。こうした約束事は最初の段階からあるものではなく、様々な可能性を求めて図面の線を引きながらポストと討議を重ねていくうちに決まっていた。内部の改造についてはこの建物の平面が9つの正方形で構成されていることに着目し、それらを各アパートの機能に配分していった。縦横に2本ずつ走る構造壁には手を加えず、その他の余分な壁や階段は取り壊す。次に正方形の分配に当たり、どのような家族構成のプログラムを組むかを考える。サンミニアトやエンポリへは車での通勤が可能であることから、そうした近隣都市に職場があり1~2人の子供を持つ若い世帯を対象にする。建物正面に既存の大きなエントランスがあることからこの部分にはやや大きめの内部空間を割り当てる。

以上の事柄と建物のコンテキストやキャパシティから全体を3つのアパートに分割することになった。その際問題となったのが中央部の正方形の扱いである。この部分は四方を壁に囲まれ外光の入らない場所である。そこでここを都市のパラッツォにおける中庭のように屋根のないセミ・パブリックな光庭とする案が初めに浮かんだのだが、それでは豊かな自然の中に位置するというコンテキストから離脱してしまう。イタリア人は日本人のように明るい室内というものに固執しないので、例えば南側にはなるべく窓を明けないようにした。次にこの中央部分を各住戸の上下移動空間に用いる案を提示し、結局3つの階段室を1つの正方形の中に集中させることで合意が得られた。そして正面ファサード側に上下階合わせて6つの正方形を割り当て、残りの空間は左右に等しく分けることにする。この配置によって四周のエレベーションのシンメトリーも容易に獲得できた。

左右に割り振られたアパートのエントランスは正面ファサードの反対側に2つ並べて設けた。左のアパートの1階床レベルには階下にカンティーナがある関係上80cmもエントランスより高くなっており天井高が2.5mしかない。日本の集合住宅においてはこれでも高いほうであるが、イタリアでは法規によって住宅の居室部は最低でも天井高2.7mと決められている。レスタウロの場

合、基準に満たなくても特例として許可は下りるそうだが、3.0mある家も多い中で2.5mでは物件の価値として不利である。そこで階下のカンティーナを改装してこのアパートに加え、物件としての価値を高めることになった。また、そのほうが建物全体の所有権上の分割が容易になり、受け渡し後の管理上も問題がない。カンティーナは上下2層に分割する。れんがのヴォールト天井を持つ上層は、新たに設けた螺旋階段を降りた下層とともに書斎やスタジオとして多目的に利用できる。最後に、2階中央部に垂直方向の空間的余裕が生まれたため、ここに屋根裏部屋を設けることになり、階段の動線が最もスムーズなことから、それは正面ファサード側のアパートに組み込まれた。また、2階の浴室の隣に造られた小部屋は内法3.2m×3.8mであるが、イタリアの最低居室面積は9.0m²とされているので、ほぼぎりぎりの大きさとなった。

ここまで計画が練られ基本設計の図面が完了しても最終的にコムーネの監査を通過しなければ着工できない。特に外観に用いる材料や色はコムーネが決めた中から選択しなければならない。しかし、逆にいえばその中に伝統的に使われてきた土地の材料や色はすべて含まれている。このように建築物の形態や色、利用法に至るまでコムーネが積極的に関与することで人々が営む日常の風景に緩やかな統一を与えられる。つまり、イタリアではレスタウロという行為そのものが共同体への住民の帰属意識を支える重要な要素となっているのである。(金)

おわりに

今回の調査研究報告は、ごく一部の研究成果の報告にとどめざるを得なかった。課題のテーマはきわめて広範な問題を含んでいるためである。形成、系譜の問題は、今後とも詳細に研究していかねばならないが、以下に現時点での課題を記して、結びとしたい。第1に、今回地域的には、ヴェネト、トスカーナ地方のごく一部の問題についてのみ言及できたと過ぎず、更に多角的な調査研究が要求される。とともに、両地方以外に、ローマを中心とした地域をはじめ、他地方の研究を欠くことができないと考えている。第2は、建築というハードの問題に限らず、現代のリゾートの問題に結びついた、ソフト面での調査研究の重要性を痛感している。(長尾)

<研究組織>

主査	長尾 重武	武蔵野美術大学教授
委員	陣内 秀信	法政大学教授
〃	石川 清	愛知産業大学助教授
〃	野口 昌夫	東京芸術大学専任講師
〃	末永 航	学習院大学非常勤講師
〃	金 一	東京芸術大学大学院